

2021年
1月12日
火曜日

豊原 法彦 経済学部長

学びの持続可能性

ご卒業おめでとうございます。卒業生を覚えてのチャペルとして少しお話をさせて頂きます。

皆さんは所定の単位を修得され大卒から単立つ、つまり「卒業」されます。言い方を変えると124単位を修得されたことで学士になられたわけです。

皆さんは経済学部で学ばれましたので、需要と供給の考え方は頭にたたき込まれていると思います。単純に言えば、ある条件の下で買手はある量を求め、売り手はある量を供給し、需要が供給を上回れば価格は上昇し、逆の場合には下がるといふものですが、その背後には、当然欲しい人はなんとか安く買おうと努力し、売る方はなんとか高い値段で売りつけようとするのが合理的だという考え方があります。

そして、完全競争市場では、双方

の満足がいくところで均衡価格が決まる訳ですが、たとえそこで一旦均衡点が見つかったとしても、その時にメリットだったものが、実は今後はそれがデメリットになること、というのが十分考えられます。それは技術革新であったり、環境意識の高まりであったり、コロナ禍による社会変容などといった要因が考えられます。

例えば自動車産業で車が今回はコロナ禍で売れ出しましたけれども、何年後かに電気自動車になれば、タイヤは変わらないけれどもエンジンはなくなり、電池とモーターで動くようになります。ご存じのようにエンジンには酸化したガソリンをうまく制御しながら爆発させて動力を得る内燃機関ですので、電気自動車にはその圧力に耐える鋳物は不要になっ

てしまいます。つまり、現時点では日本にとつてメリットとなっている技術がデメリットになってしまいう事もあり得ます。そうならないためにも、陳腐化を避けるための技術進化、それに対する適応が必要になってくるわけです。

そのためにも多様な視点で、そして相手の側に立った考え方、スタンスを身につける事が重要かと思えます。需要者であれば供給者の立場にたち、なぜそれがその価格で供給されているのか、また逆に供給者であれば、なぜこの価格で、これだけの量が需要されているのか、そこに思いをいたすことで、いわゆるWin-Winの関係、悪くともWin-Evenの状況を作り出すことが重要だと思えます。

さらに、10年前にスマホは存在していませんでしたが、現時点ではスマホなしでの生活は考えられませ

ん。アナログカルに考えると10年後には、現時点で存在していない何かがある、その時にはそれなしでは生活できないということになっているかもしれない。そのような歴史の流れを常に感じながら学んでいくことが、今後一層重要になってくると考えてください。

皆さんはアフターコロナ、ウイズコロナと言われるような新しい環境の下に船出をされていくことになりました。今後、社会生活を通じた学びの中で、新たな知識、社会の常識も獲得しながらも、自らの軸を明確にし、Sustainability、持続可能性を頭に入れて、満足のいく日々を過ごされること、祈念しております。